

宝徳三年本『黒谷上人絵詞拔書』をめぐって

小山正文

一

愛知県安城市野寺町野寺の本證寺に、『黒谷上人絵詞拔書』という学界未知の古写本一冊が所蔵されている(写真¹)。

周知のように法然(一一三三—一二二二)の浄土宗では、その没後遺弟間に宗義の対立が顕著となり、^{註2}ために法然の伝記や絵巻物にもそれぞれの立場にもとずく編集がなされたのであった。^{註3}したがって今日かなり多くの法然伝が残されているわけだが、^{註4}なかでも南北朝時代に完成した鎮西義系の京都知恩院蔵国宝『法然

宝徳三年本『黒谷上人絵詞拔書』をめぐって



写真一 黒谷上人絵詞拔書(外題)
安城市 本證寺蔵

上人行状絵図^{註5}』は、そのかず四十八巻という日本絵巻物史上でもまれにみる浩瀚さをもって知られ、それはそのまま法然伝の決定版ともなったのである。だからこの『行状絵図』の詞書は早くから関心の的となり、本願寺覚如（一二七〇—一三五一）の長子存覚（一二九〇—一三七三）などは、成立まもないそれを写すに必要な料紙の数を備忘録の『袖日記』へつぎのごとくメモしたほどであった。^{註6}

黒谷四十八巻絵詞

杉原四半級五行定

- | | | |
|----|--------------------|------|
| 第一 | 第一巻ヨリ
第五巻マテ | 三十六丁 |
| 第二 | 第六巻ヨリ
第十巻マテ | 三十九丁 |
| 第三 | 第十一巻ヨリ
第十六巻マテ | 四十五丁 |
| 第四 | 第十七巻ヨリ
第二十巻マテ | 五十丁 |
| 第五 | | |
| 第六 | | |
| 第七 | | |
| 第八 | | |
| 第九 | 第四十一巻ヨリ
第四十五巻マテ | 六十二丁 |
| 第十 | 第四十六巻ヨリ
第四十八巻マテ | 三十八丁 |

いまここに紹介しようとする本證寺の『黒谷上人絵詞拔書』なる書も、実はこの『行状絵図』の絵詞を拔萃したものにほかならない。したがって内容的にはさしてめずらしくもないが、それが室町時代中期の宝徳三(一四五二)年に写されている点に注意をひくのである。

二

さて、本證寺所蔵の『黒谷上人絵詞拔書』は、タテ二十七・二センチ、ヨコ二十一・五センチで、粘葉綴九十一葉を数える。表裏表紙以外の全紙にヘラをもって罫線を敷き半葉八行、一行二十四字内外で本文を写す。原表紙中央には「黒谷上人絵詞拔書上」の外題があり(写真一)、一葉おいてその裏に「奉寄進九品寺 仙通」の別筆墨書を見る(写真二)。ついで序にはじまる本文内容目録三十二条がつぎのごとく二段書きされている(写真二・三)。

。序

一 上人誕生等事

二 時国先祖事付夜討三 菩提寺登山事母儀請暇四 叡山登山等事開白ニ参逢

宝徳三年本『黒谷上人絵詞拔書』をめぐって

五出家ノ後黒谷ニ蟄居事

六蔵俊寛賀慶賀等対面事

七於月輪殿或山僧対面事付澄憲法印

八一切経五反披覧ノ後一心専念文見得給事

九勝法房上人ノ真影ヲウツス撰事

十或時勢至并現レ給事

十一或時非画像ニ非木像ニ阿弥陀如来現シ給事

十二別時念仏ノ時光明等現スル事

十三於月輪殿頭光ヲ現シ給事

十四正行房ノ事

十五聖光房ノ事

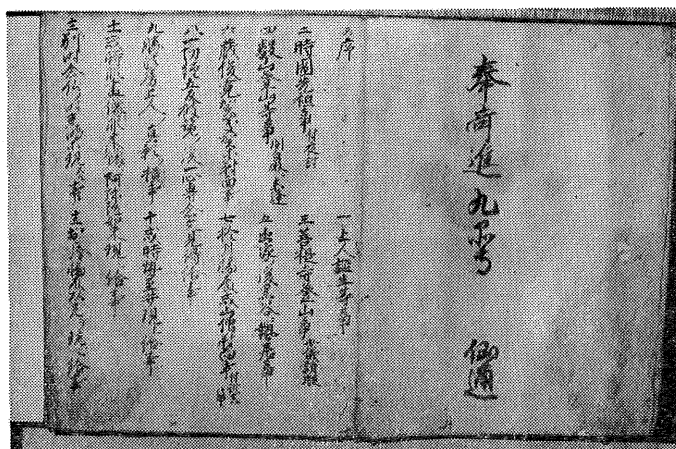
十六明遍僧都事上人ニ現參并臨終等事

十七禅林寺静遍僧都事

十八一向専修ヲ立給謂事付胤僧正事

十九嵯峨正信房事

廿播磨信寂房事



写真二 黒谷上人絵詞抜書（寄進墨書・目録） 安城市 本證寺蔵

廿一勢観房事

廿二法性寺空阿弥陀仏事

廿三往生院念仏事

廿四皇田阿闍梨事
クワツミン

廿五妙覚寺浄心房事

廿六天台眞座主事

廿七慈鎮和尚事

廿八或山僧東大寺棟木上ヲ見信心成就スル
事

廿九河内国天野四郎事

卅上人浄土宗ヲ立給謂レノ事

卅一配所ノ事
数ヶ条
在之

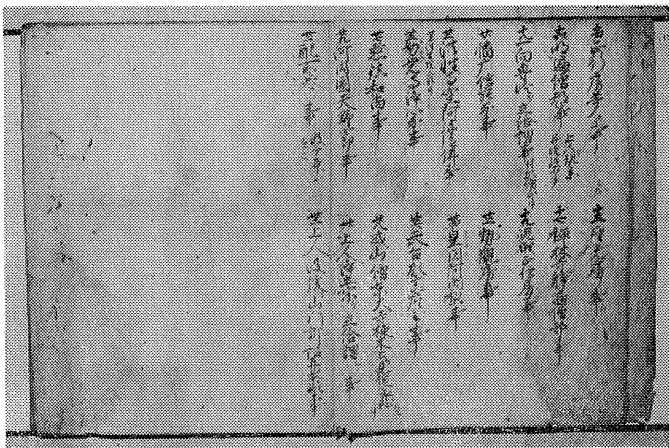
卅二上人没後ニ山門訴詔并ニ茶毗等事

右の目録のあと第四葉目より本文へ入るが、その初行は、

「黒谷上人絵詞拔書」と首題にあてている。本文は『行状絵
図』の第一巻、第二巻、第三巻、第四巻、第五巻、第六巻、

第八巻、第十一巻、第十四巻、第十五巻、第十六巻、第十九

宝徳三年本『黒谷上人絵詞拔書』をめぐって



写真三 黒谷上人絵詞拔書（目録） 安城市 本證寺蔵

宝徳三年本『黒谷上人絵詞抜書』をめぐる

卷、第三十卷、第三十三卷、第三十四卷、第三十五卷、第三十六卷、第三十九卷、第四十卷、第四十二卷、第四十三卷、第四十五卷、第四十六卷、第四十八卷よりの抜き書きで、その最末尾には、

宝徳三年九月日 筆者源久家

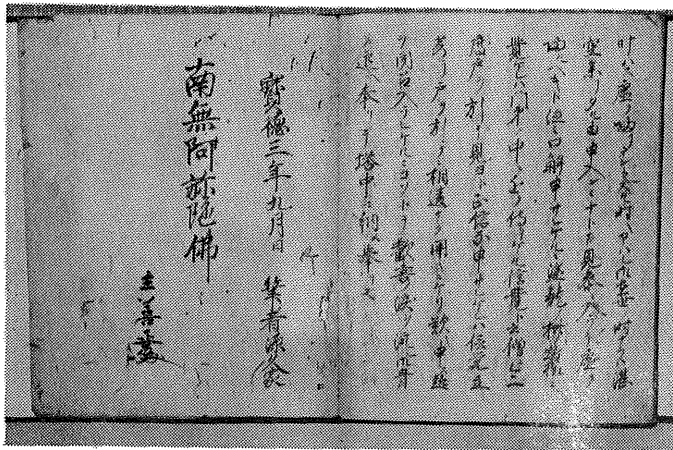
南無阿弥陀仏

主善正（花押）

□ □ □

という奥書があつて（写真四）、本書の書写年代およびその筆者を明らかにしている。この奥書は一見本文と筆致を異にするかのような感を与えるが、あらたまって書いたせいであろう子細にみると同筆で、また本文全体の筆風、使用文字、紙質、装釘等より推しても、これが文字どおり宝徳三（一四五一）年の写本とすることに異論はないであろう。

筆写年代と六字名号に続いて書される「主善正（花押）」の別筆墨書は、けだし本書の持主ないしは願主と考えられる



写真四 黒谷上人絵詞抜書（奥書） 安城市 本證寺蔵

が、本文にくらべやや後筆のきらいがある。むしろここで注目されるのは善正の自署のつきにもとにか書かれていてそれが削除されている事実であろう。それがいかなる文字であったのか全然わからないのは残念であるが、ともあれ本書写本にはこのように筆者の源久家、持主あるいは願主と目される善正、そして寄進人の仙通といった三名の自署が出ていることに注意する要があるも、遺憾ながら彼等の伝歴はこれをつまびらかにしえない。ただ善正は後記竜谷大学図書館蔵文明十八（一四八六）年本『黒谷上人絵詞』の寄進人として記される善正とかりに同一人とすれば、それは天文七（一五三八）年ごろの人ということになるも、同名異人の可能性がつよい。また本書を九品寺へ寄進した仙通についてもより明らかではないが、『法水分流記』^{註7}の一念義系に仙才、西山義系に仙空、仙覚、仙阿など「仙」の字を冠する者のあることをおもえば、やはり仙通も本書を九品寺へ寄進したこととあいまち浄土宗系統の一僧侶であったのかもしれない。なお九品寺も定かではないが、あるいは覚明房長西（一一八四—一二六六）の洛北一条九品寺でもあろうか。

- 一、ひらかなをカタカナとすること。
- 二、絵に関係なく数段を連続して写していること。
- 三、順序が必ずしも一致しないこと。
- 四、かなを漢字にあらためている箇所が多いこと。
- 五、同一人物が登場する説話はまとめて写す場合が多いこと。

六、途中を省略し文字どおり抜書にしている部分が存すること。

七、本書に抜書される『行状絵図』は全部で二十四巻にわたるが、これよりすれば今はなき本書の下冊には残りの二十四巻が抜書されていたかもしれないこと。

三

ところで故井川定慶博士はその著『法然上人絵伝の研究』^註において、本書と同題名の古写本が京都の陽明文庫と西本願寺に所蔵されていることを報告しておられる。

前者の陽明文庫本は、同じく博士の編になる『法然上人伝全集』に全文収録されているから、容易にその内容を窺知することができるが、やはり『行状絵図』よりの抄出本である。しかしてこの陽明文庫本は、同文庫において『法然上人絵詞抜書』と題され一般文書目録五五六八八の分類番号が付されている。袋綴上下一冊よりなり、タテ二十七・三センチ、ヨコ二十二・五センチで全紙数二十三。うち上巻六・五、下巻八、その他五・五、遊紙一、表裏表紙各一を数える。半葉十五行、一行十五字から二十三字。外題は「法然上人絵言司」となっているも首題に「黒谷上人絵詞抜書」と明記され（写真五）、陽明文庫本が本證寺の宝徳三年本と同題であることを知るであろう。なお、文庫本右首題直下には「法然上房源空実名」の注記をみる。そして同本の奥書は（写真六）、

写真五 黒谷上人絵詞抜書（首題） 京都市 陽明文庫蔵

黒谷上人絵詞抜書 法華文憑堂
 夫の我を師釋也々々善流浪事味修教
 為深平寺子也然の教也之他也無
 在教化之徳と泰之變遷湯忍固之
 七之現々を憂樹花咲か令物懐懐唱
 園林ノ風ノ痛と公世分箇年迄等群也
 後と懐後ニを録廻は火記三酒流
 村並見廻て其中央を二門様と
 過きありては乃と然と他と時流
 原女山唐海地と三思燭免れし煩
 憶具と見也

本云

永享九丁年八月日於江州金勝寺書写之畢

右筆玉泉坊寛泉

持主正玉

皆文安四年十月廿五日書写之了

となつていて、これの前後に数条の法語が覚え書き風に記されるが、ともあれこの奥書によって結局文庫本は、永

写真六 黒谷上人絵詞抜書（奥書） 京都市 陽明文庫蔵

一切ノ煩ハ只我ノ心ノ惑也スノ禪ノ入釋ノ
 奥中ノ如多ノ般ノ厚用ノ机多ノ事ノ
 三ノ名ノ留也是ノ事也ハ不思行ノ様ノ
 承享九丁年八月日於江州金勝寺書写之畢
 右筆玉泉坊寛泉
 持主正玉
 皆文安四年十月廿五日書写之了

享九（一四三七）年八月に玉泉坊覚泉なる僧が江州金勝寺において書写し、それが正玉所持本となっていたのを十年後の文安四（一四四七）年十月二十五日に筆写された本であることがわかる。文庫本の料紙は薄手の粗楮紙で紙背に書状等があり、書写文字も粗卒にして装釘表紙とともに仮に写し留めた感じであるが、奥書の文安四年の写本として大過ないであろう。その筆者は不明ながらこの文庫本は、いま問題にしている宝徳三（一四五二）年の本證寺本とほとんど時を同じくして書写されている事実⁹に留意しておきたい。

なお文庫本の底本が写された場所金勝寺は、げんに滋賀県栗太郡栗東町金勝山上にあって、『興福寺官務牒疏』によれば大菩提寺が正式の名称で、白鳳元（六七三）年役優婆塞の靈蹟、養老元（七一七）年金爾菩薩の開基にして良弁僧正（六八九―七七三）諸尊安置の梵刹と伝える。『続日本後紀』天長十（八三三）年九月辛酉（八日）条に同寺が定額寺に列せられたことを記し、『類聚三代格』には寛平九（八九七）年六月二十三日付の「応試度金勝寺年分度者二人事」に関する太政官符が収められるなど金勝寺は古代官寺のひとつであって、そのことを裏付けるがごとく今も同寺には平安時代の仏像や古絵図を伝存している。⁹

ところで金勝寺に関し逸することのできない興味深い事実は、実に陽明文庫本の底本が書写された永享九年前後に浄土宗一条派の流れをくむ隆堯（一三六九―一四四九）が、同寺東谷の草庵においてさかんに布教していたこと¹⁰で、この現象をふまえれば同寺において『黒谷上人絵詞抜書』が写されるにいたった事情もよく納得され、ひいては永享九年本の筆者である玉泉坊覚泉、また同本の持主となった正玉が共に隆堯の門人であったかもしれないという想定も可能となってくるであろう。

右の永享九年本が十年後の文安四年に写された本が、とりもなおさず現在の陽明文庫本であるが、ちょうどこのころ金勝寺は法相宗興福寺を離脱し現在の天台宗延暦寺末となったことが菅家本『諸寺縁起集』^{註11}にみえているので、いでをもって記しておく。

さてつぎに後者の西本願寺本『黒谷上人絵詞抜書』をいちべつしておく、これについては、本願寺派宗学院編『古写 眞宗聖教現存目録』^{註12}にその概要が記されており、また井川定慶博士も所論を発表済みである。^{註13}

これらによると西本願寺本は袋綴、綾布表紙、タテ二十六センチ、ヨコ十七・五センチ、七十九葉、半葉九行、一行二十二字内外で、外題に「黒谷上人絵詞伝抜書 證如上人毫」とあり、首題は「黒谷聖人伝絵詞第二十一巻」、以下単に「廿二巻」、「廿三巻」、「廿四巻」と書し、第二十五巻ははじめ一葉を欠くため首題がみられず、ついで「黒谷上人伝絵詞第廿六巻」、「黒谷上人伝絵詞第廿七巻」と書かれ、また単に「廿八巻」、「廿九巻」とあって、終り第三十巻はやはり首題なくいきなり本文へ入っているが、ともかくこれによって西本願寺本は『行状絵図』の第二十一巻より第三十巻にいたる計十巻の抄出本であることが判明しよう。

本書の奥には「ウフ時天文五年丙申六月八日 釈證如之書」とあり、もって西本願寺本は天文五（一五三六）年大坂石山本願寺最盛期の法主第十世證如（一五一六—一五五四）二十一歳の写本とされる。もっとも證如の『天文日記』同年月日条にはなんら本書に関する記載はないので、これを写すにいたった事情はわからない。なお同本を収納する箱にはつぎのような箱書がある。「黒谷上人絵詞伝抜書 信受院證如上人御筆 文如上人御筆」。これよりして外題を「抜書」としたのは西本願寺第十八世文如（一七四四—一七九九）であったわけだが、いずれにし

ても『行状絵図』よりの抄出本であること陽明文庫本や宝徳三年本と同様である。

ちなみに井川博士は西本願寺のこの證如本をもって、最初にかかげた『存覚袖日記』の転写本でないかといわれるが、はたしてそうであろうか。疑いなきをえない。その理由は、

一、『袖日記』の記事は写すに必要な料紙の数を記したまでで、存覚自身『行状絵図』の詞書全文を写したわけではあるまい。

二、存覚のメモと證如本の冊数が合致しない。

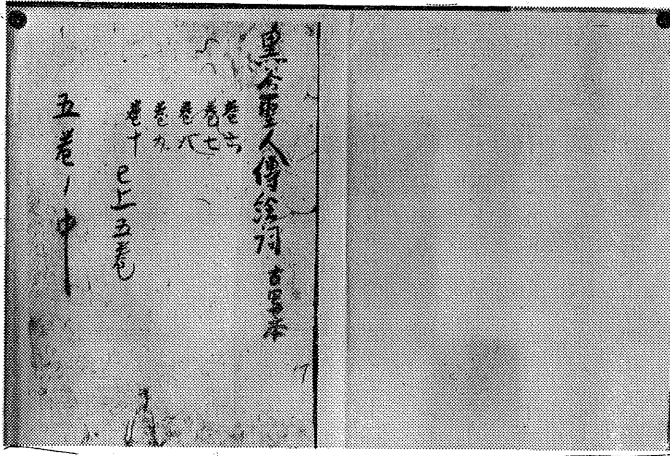
三、證如本は各段大体そろっているとはいえ所詮「抜書」で存覚の意図にそっていない。

四、存覚の『袖日記』はおそらく知恩院現蔵の『法然上人行状絵図』四十八巻を拝観した時のメモとおもわれ、いっぽう證如本は存覚とは全く関係のない別本、たとえばこのすぐあとでのべる文明十八（一四八六）年本のようなものを底本として書写したものでなかったかと考えられること。

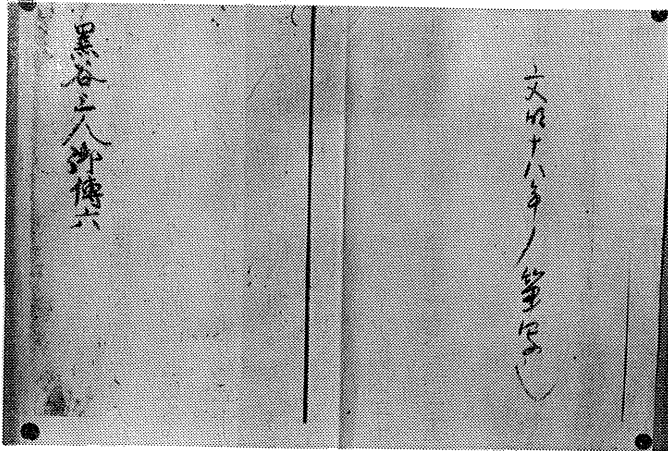
等々があげられ強いて存覚のメモと證如本を結びつける必要はないようにおもうがいかがなものであろうか。

それとはともかく、この證如本に前後してなお『行状絵図』の詞書を写す本が他にもあって注目したい。その一は竜谷大学図書館に蔵せられる文明十八（一四八六）年の写本である。^{註14}

該本は近年改装され袋綴五冊本帙入り。その題箋に「黒谷聖人御伝」とあって図書番号は〇二一―一五九。しかして第一冊はタテ二十六・八センチ、ヨコ二十・一センチで紙数三十九。初葉表に別筆で「黒谷聖人伝絵詞 古写本 巻六、七、八、九、十、已上五巻、五巻ノ中」と書かれ（写真七）、その裏に「文明十八年ノ筆写也」とある



写真七 黒谷聖人伝絵詞（第一冊巻頭） 京都市 竜谷大学図書館蔵



写真八 黒谷聖人伝絵詞（第一冊外題） 京都市 竜谷大学図書館蔵

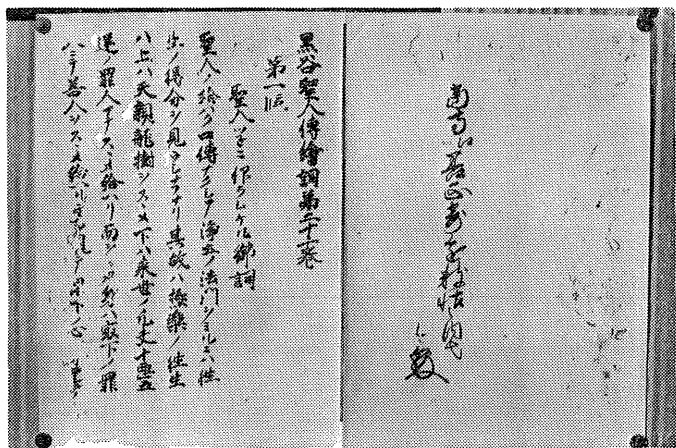
(写真八)。次葉表には「黒谷上人御伝六」、同裏に「従弟六至第十」とあり、第三葉目より「黒谷上人伝絵詞第六卷」の首題を置いて本文に入り第十巻まで計五巻を写す。最終葉表には「天文七年ニ当寺江善正寄進教帖之内也 常楽寺(花押)」とこれまた別筆墨書がしたためられている。

第二冊はタテ二十七・四センチ、ヨコ二十一・九センチで紙数はわずか五枚。第一冊に続く「黒谷聖人伝絵詞第十一巻」をその首題のもとに写し、やはり最終に「天文七年ニ当寺江善正寄進教帖之内也 今(花押)」とある。

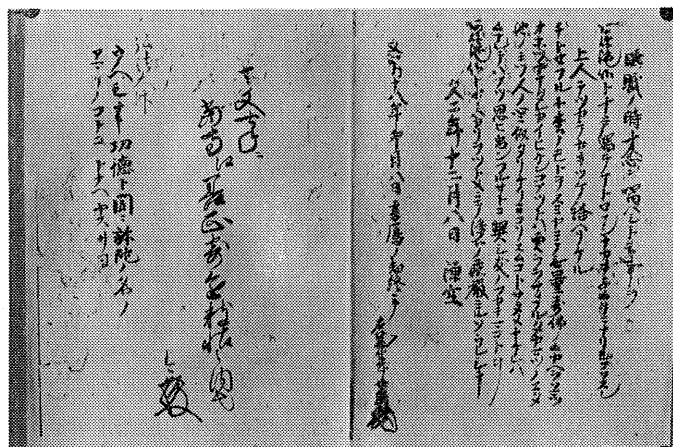
第三冊はタテ二十七・一センチ、ヨコ二十一・五センチを計り紙数五十二。内容は第十六巻より第二十巻までの計五巻。終りに「天文七年ニ当寺江善正寄進教帖之内也 常楽寺(花押)」なる第一冊と同じ記がある。なお第二第三冊は第一冊と筆致を異にしている。

第四冊はタテ二十七・五センチ、ヨコ二十二・一センチ。紙数二十でその初葉表に「黒谷上人御伝二十一」、同裏へ例の「当寺江善正寄進教帖之内也 今(花押)」と記し(写真九)、第三冊に続く第二十一巻、第二十二巻の両巻を第一冊、第二・三冊とも異なる筆致で写す。

第五冊はタテ二十六・九センチ、ヨコ二十一・五センチ。はじめより十五枚までが袋綴、それより二十四枚粘葉綴があり、ふたたび最後まで十六枚を袋綴としている。同冊には第二十六巻より第三十巻まで計五巻を写し、筆蹟は第四冊に同じい。そして最後より二葉目の裏末尾に「文明十八年卯月八日書写ノ功終早 右筆生年廿歳(花押)」と本書の書写年月日および筆者を明記する(写真十)。その次葉へ「天文七年ニ当寺江善正寄進教帖之内也 今(花押)」とあって、続き「弘法大師 ウヘモナキ功德ト闍ニ弥陀ノ名ノアマリノコトニトナヘヤスサヨ」という詠歌



写真九 黒谷聖人伝絵詞（第四冊 首題・寄進墨書）
京都市 竜谷大学図書館蔵



写真十 黒谷聖人伝絵詞（第五冊 與書・寄進墨書）
京都市 竜谷大学図書館蔵

を添える（写真同前）。

このように竜谷大学図書館蔵本『黒谷聖人伝絵詞』は、筆者も三人ありかつ書冊の大きさもまちまちのため行数も少いところで八行、多い場合は十四行と一定せず字詰もまた不定であるが、文明十八（一四八六）年の書写になることは確実とおもわれる。文明十八年二十歳の本書の筆者がだれであるのかは今後の課題であろうが、首題を黒谷聖人とすること。天文七（一五三八）年に今小路常楽寺へ本書が寄進されていること。この二点よりして本書の筆者は真宗の流れをくむ若き一徒であったと推測される。天文年間の今小路常楽寺住持は第八世純恵證賢また本書の寄進人善正は『天文日記』天文六（一五三七）年正月廿八日条、同年十一月十日条、同十五（一五四六）年正月十三日条、同年九月廿七日条、同十六（一五四七）年三月十三日条等々にみえる近江州上坂の善正ではないかとおもう。西本願寺に蔵せられる『祖師一口法語』一帖も彼の寄進になることは「天文七年当寺善正寄進致シ納也 常（花押）」という同様の書きつけによって知られる。註15善正はこのように聖教の所持者として注目されるわけだが、ここでおもいあわされるのはさきにしたためられていた「主善正（花押）」の署名である。「主」は願主の意とも解されようが陽明文庫本『黒谷上人絵詞抜書』の「持主正玉」に照せば所持者とうけとることも可能で、あるいは宝徳三年本の善正即天文年間の善正という偶然もありうるかもしれない。しかしいまのところこれを決する史料はまったくないのであり、まして宝徳本は浄土宗系、文明本は真宗系といちおう色分けされる点などよりすれば、やはり二人は同名異人とみなしておくのが無難であろう。

ところで文明十八年本『黒谷聖人伝絵詞』が、もともと『行状絵図』四十八巻全部の詞書を備えていたのか、それとも最初から五冊十八巻だけであったのだろうかという問題に対し示唆的なのは、第五冊末にしたためられる「書写ノ功終早」の奥書で、これより推せばやはり文明十八年本は当初より十八巻のみの抄出本とみるのが至当かとおもう。そして全四十八巻が写されるにいたるのは、天文五年の證如本以後なお数年を経た永禄・天正のころまでまたねばならなかった。かつて井川定慶博士が紹介された燈誉本がすなわちそれにほかならない。^{註16}

同本は『法然上人伝絵図』と題する袋綴本で、その奥に次掲のような識語があり『行状絵図』四十八巻の完本という。

本云 永禄元^{戊午}年八月廿五日

燈誉^{判在} 八十六歳書功訖

天正九年^{未庚} 六月廿五日書功畢

三十郎三慶（花押）

これによって本書は永禄元（一五五八）年八月八十六歳の燈誉が写した本を二十四年後の天正九（一五八一）年六月に三十郎三慶なるものが転写した本と判断されるが、ただ燈誉を大東急記念文庫蔵（京都久原文庫旧蔵）天文二十一（一五五二）年版『浄土略名目』の刊記にみえる「比丘洛陽東山知恩院第廿七世主翁燈誉八十一載書」^{註17}、あるいは『蓮門精舎旧詞』^{註18}第九に記される永禄二（一五五九）年八十八歳入寂の和泉西福寺（現大阪府和泉市春木町在）中興開山重蓮社燈誉然公とした場合年令が合わないし、また天正九年の干支は辛巳なのに同八（一五八〇）年の庚

辰、もしくは同十一（一五八三）年の癸未をおもわずような庚未とするなど不審点が多い。あるいは再転写本であるか。このへんを確認すべく井川博士が所蔵者と記される南史一氏（西宮市木津山町九十七へ堺市浜寺より転居）に問いあわせたところ、こうした写本は所持した記憶が全然ないとのことであった。しかしいずれにしても『法然上人行状絵図』四十八巻全部の詞書が永禄元年および天正九年に写されたことだけは認めてさしつかえないであろう。

桃山時代にいたってよりやく全巻写されるようになったこの傾向が、お茶の水図書館成實堂文庫蔵慶長十二（一六〇七）年の文誉写本『法然上人一代記』四十八巻十一冊、註19さらに寛永九（一六三二）年の木活本『黒谷聖人伝絵詞』四十八巻十冊や同十三（一六三六）年、同二十一（一六四四）年の版本『黒谷上人伝絵詞』四十八巻十冊へとひきつがれていくのであろう。

四

以上概観した『法然上人行状絵図』四十八巻の詞書写本類、すなわち永享九（一四三七）年玉泉坊覺泉本、文安四（一四四七）年陽明文庫本、宝徳三（一四五一）年源久家本、文明十八（一四八六）年竜谷大学図書館本、天文五（一五三六）年證如本、永禄元（一五五八）年燈誉本、天正九（一五八一）年三十郎三慶本、慶長十二（一六〇七）年文誉本等は、すべて室町中後期から桃山時代にかけてのもので、それらは平均すると二十年に一本といふか

なり密度の高い割合で写されている事実に注目したい。こうした事象の背景にはつきにあげるような歴史的要因を考慮してもいいであろう。

その一は、すでに井川博士も指摘されたところだが、永享三(一四三一)年や永正十四(一五二七)年六月二十八日の知恩院回祿による『行状絵図』の寺外避難で、それを機にこの秘宝が人目にふれやすくなった点があげられる。すなわち『看聞御記』^{註21}永享十(一四三八)年六月二十四日条の「自入江殿法然上人絵^{四巻}給 花山院之絵也

禁裏為入見参伝借申」、同二十五日条の「絵内裏進之」、あるいは『康富記』^{註22}文安元(一四四四)年閏六月十日条の

「次向伊勢兵庫助亭 法然上人之絵四十八巻 知恩院在之 二十巻許在之 予披見了」、同十一日条の「昨日之殘

法然上人之縁起 今日具又見了 西山上人之分四十七巻ノ巻ニアタル 彼等之分今日并拝見了 昨日又石山之本地

之絵四巻在之 同拝見了 重宝一度令拝見之 多年之大望成就 可謂愚幸哉」、また『実隆公記』^{註23}の文明八(一四

七六)年六月十一日条の「午刻著束帯 参内 則参御前 法然上人絵四巻拝見之」とか『宣胤卿記』^{註24}永正元(一五

〇四)年八月七日条の「詣知恩院聴聞法談^{法然上人絵詞}」、『お湯殿の上の日記』^{註25}大永七(一五二七)年三月十八日条の

「ちおん院より法然上人のゑ四十八くわんけさむに入らるゝ」、同じく『実隆公記』^{註26}同年月二十一日条の「帰路詣

東洞院殿 法然上人絵御覧之間 詞自一至五誦之」、そしてまた『お湯殿の上の日記』^{註27}天文五(一五三六)年六月

二日条の「もんせき 竹のうち殿御まいり ほうねんのゑんきあそはさせまいらるゝ」等々の条々は、実際知恩院

の『行状絵図』が寺外において披見された事実を示すものにほかならない。永享九年本や宝徳三年本の『黒谷上人

絵詞抜書』、また文明十六年本『黒谷聖人伝絵詞』等が、知恩院の回祿を機におこなわれたとするのはきわめて自

然といえるのではなからうか。ちなみに井川博士は奈良当麻寺往生院本『法然上人形状絵図』四十八巻も永享三年の知恩院回禄時に複製されたのではないかと推測されるが、史料面でやゝ弱いとはいへ傾聴にあたいする説といわねばならない。

十五、六世紀に『行状絵図』の絵詞抜書が多く作られた第二の理由として、当時すこぶる盛況であった法然掛幅絵伝絵解きの影響を没却するわけにはいかない。法然の掛幅絵伝は南北朝時代から室町時代中期にかけての真宗で多くおこなわれ、現存遺品も十四、五点管見に入っているが、その絵伝絵解きによる法然像の滲透はまことに想像を絶するものがあつたとおもわれる。したがって人々をして法然伝の決定版である『行状絵図』よりの抜萃本作製をいやが上にも促進せしめたであろうことは想像に難くはなからう。特に十四世紀の抄出本が衆庶と接する絵解き法師的無名人によって写されている点が、なおさらこの感を深くするのである。

第三にあげねばならないのは、なんといっても激動してやまなかつた当時の世相である。

玉泉坊寛泉本の永享九（一四三七）年が二十三歳、陽明文庫本の文安四（一四四七）年が三十三歳、源久家本の宝徳三（一四五二）年が三十七歳、竜谷大学図書館本の文明十八（一四八六）年が七十二歳にそれぞれ相当する本願寺蓮如（一四一五—一四九九）は、その当時のありさまを『御文』でつぎのごとくいつている。^{註29}

夫当時世上の躰たらくいつのころにか落居すべきともおぼへはんべらざる風情なり　しかるあいだ諸国往来の通路にいたるまでもたやすからざる時分なれば　仏法世法につけても千万迷惑のおりふしなり　これによりて（あるいは）靈仏靈社参詣の諸人もなし　これにつけても人間は老少不定ときくときは　いそぎいかなる功德善根を

も修しいかなる菩提涅槃をもねがふべきことなり。しかるにいまの世も末法濁乱とはいひながら、こゝに阿弥陀如来の他方の本願はいまの時節はいよ／＼不可思議にさかりなり。(下略)

周知のように鎌倉時代法然(一一三三—一二二二)、親鸞(一一七三—一二六二)らによってまかれた念仏の種子は、蓮如の室町時代にみごと開花したのであった。このような時に念仏の元祖とあおがれる法然が大きく顧慮されてくるのはむしろ理の当然であろう。『行状絵図』四十八巻の絵詞抜書がさかんにおこなわれた事由も、またもって了解できようというものである。

以上、新出の宝徳三年本『黒谷上人絵詞抜書』をめぐっておもいつくままに記してみたが、なにぶん目下しられる今本は上冊のみの端本である。他日これの下冊が世に出ることをひたすら念願して本稿の結びとする。

註

(1) 本書が本證寺へ入ったのは、昭和四十九(一九七四)年四月のことで、したがって本證寺の歴史と本書はなにの関係もないことをはじめに申添えておく。

(2) 法然門下の異義と分流については、すでに鎌倉時代に成った正嘉元(一二五七)年の愚勸住信『私聚百因縁集』、文応元(一二六〇)年の日蓮『一代五時図』、文永六(一二六九)年同じく日蓮の『浄土九品之事』、応長元(一二三一)年の擬然『浄土法門源流章』、文保三(一二三九)年の金沢文庫蔵『観經玄義分聽聞抄』等々に隆寛(一一四八—一二二七)の多念義、聖光(一一六二—一二三八)の鎮西義、幸西(一一六三—一二四七)の一念義、証空(一一七七一—一二四七)の西山義、長西(一一八四—一二六六)の諸行本願義が顕著な存在として記され、さらに永和四(一二七八)年の静見勸録『法水分流記』には上の五義に加え信空(一一四六—一二二八)の白川門徒、親鸞(一一七三—一二六二)の大谷門徒湛空(一一七六一—一二五三)の嵯峨門徒、源智(一一八三—一二三八)の紫野門徒があげられており、もって這般の事情

宝徳三年本『黒谷上人絵詞抜書』をめぐって

を想察することができよう。

- (3) 田村円澄『法然上人伝の研究』一九五六年五月 法蔵館。
- (4) 三田全信『^{成立}法然上人語伝の研究』一九六六年五月 光念寺出版部。
- (5) 井川定慶集『法然上人伝全集』一九五二年九月 法然上人伝全集刊行会。
- (6) 『^新日本絵巻物全集』一四 一九七八年七月 角川書店。
- (7) 『続日本絵巻大成』一・二・三 一九八一年五月・七月・九月 中央公論社。
- (8) 竜谷大学仏教文化研究所編『存覚上人一期記 存覚上人袖日記』（『竜谷大学善本叢書』三）一九八二年四月 同朋舎出版 一八四ページ。
- (9) 平松令三編『真宗史料集成』七 一九七五年十二月 同朋舎 八〇四ページ。
- (10) 井川定慶『法然上人絵伝の研究』一九六一年三月 法然上人伝全集刊行会 一三七・一五四ページ。
- (11) 川勝政太郎「山城・近江における良弁僧正関係の古寺について」（『南都仏教』三一）一九七三年十二月。宇野茂樹『近江路の彫像』一九七四年五月 雄山閣 一五二ページ。
- (12) 玉山成元『中世浄土宗教団史の研究』一九八〇年十一月 山喜房仏書林 一八八ページ。
なお金勝寺近くの阿弥陀寺には隆堯筆の讃をもつ永享十二（一四四〇）年七月の法然像版木が現存していることもこのさい見逃せない。藤堂祐範『浄土教版の研究』一九七六年二月 山喜房仏書林 九四ページ。
- (13) 藤田径世編『校刊美術史料』寺院篇上巻 一九七二年三月 中央公論美術出版 三六三ページ。
- (14) 本願寺派宗学院編『^{古写}真宗聖教現存目録』一 一九三七年八月 宗学院 六五ページ。
- (15) 井川定慶「西本願寺所蔵の黒谷聖人絵詞伝抜書―天文五年の證如上人筆―」（『仏教大学研究紀要』四四・四五）一九六三年六月。
- (16) 『竜谷大学図書館善本目録』一九三六年十一月 竜谷大学出版部 一六ページ。
- (17) 註12の六五ページ。
- (18) 註8の一五九ページ。

- (17) 川瀬一馬『大東急記念文庫貴重書解題』二仏書之部 一九五六年十月 大東急記念文庫 一三三ページ。
- (18) 『統浄土宗全書』一八 一〇三ページ。
- (19) 蘇峰先生古稀祝賀記念刊行会編『成實堂善本書目』一九三二年五月 民友社 七一ページ。
註8の一四七ページ。
- (20) 『統群書類従』補遺二下 五五二ページ。
- (21) 『増補史料大成』三八 六五ページ。
- (22) 『実隆公記』一 一六五ページ。
- (23) 『増補史料大成』四五 七二ページ。
- (24) 『統群書類従』補遺三(三) 二三三ページ。
- (25) 註23の七 二八ページ。
- (26) 註25の(四) 一八八ページ。
- (27) 小山正文「初期真宗と法然聖人掛幅絵伝―野寺本證寺本をめぐって―」(『安城歴史研究』八)一九八二年十二月。
- (28) 堅田修編『真宗史料集成』二 一九七七年二月 同朋舎 二二一ページ。
- (29)